

姉妹都市アウクスブルクを訪ねて

団長 中川 一

いざドイツへ

8月24日午前8時、関西空港に集合した私達は、期待と不安の入り混じった気持ちで、オランダのアムステルダム経由でドイツ・ベルリンに入り、夕食の後ホテルに到着したのは現地時間で午後9時であった。早くも集合から20時間後のことである。

最近の青年使節団の恒例となっているがアウクスブルク市訪問直前にドイツの首都であるベルリンを訪問し、ドイツの歴史や雰囲気を掴むとともに、団員の結束を図ろうという意図もある行事である。

初日は、夕食をとりホテルで宿泊をするだけの日程ではあったが、これまでの日本での研修やドイツまでの長いフライトで団員達はすっかり打ち解けた様子であった。

宿泊は、旧東ドイツ地域内のアルカディアベルリンホテル、それほど大きなホテルではないが清潔感のあふれるアットホームな雰囲気のホテルで、旅の疲れもあり、皆グッスリと眠れたようである。



2日目は、ベルリンの市内観光、東西を隔てていた「ベルリンの壁」や「ブランデンブルク門」、世界遺産の「ペルガモン博物館」などを精力的に見て回った。これがEUを牽引する国の首都なのかと思うほど落

ち着いた佇まいは、日本という国から来た私達にとってある意味で大きなカルチャーショックであり、同時に短い滞在ではあったが、大きな収穫のある滞在であった。

姉妹都市アウクスブルク

ベルリン空港からミュンヘン空港まで1時間強のフライトの後、空港でアウクスブルク市の職員の出迎えを受けた私達はバスで姉妹都市アウクスブルク市に向かった。



(1) アウクスブルクの街並み

アウクスブルクは、中世の街並みが息づくロマンチック街道沿いにあるルネサンス期の面影を残す優美な都市であり、国の内外からの観光客も多く2000年を超える歴史を持つ街である。また現在は、金属・繊維・電子産業が盛んな工業都市でもある。

高速道路を降りて市内に入り、最初に目に入ってきたのはその街並みの美しさであった。市内には、ルネサンス様式を取り入れた堂々たる建築物も多く、道路に敷き詰められた石畳、手入れの行き届いた庭や街路樹などとも調和して、いかにも歴史のある文化都市として発展してきた印象を受けた。

アウクスブルクは、第二次世界大戦で多くの建物が破壊されたそうであるが、戦後、伝統ある建物を出来るだけそのままの姿で復興しようと計画され、現在の姿が保たれたのだと聞いた。当時のアウクスブルク市民の気概が、今の街の伝統と誇りと風格に繋がっているのである。

(2) 受入家庭との対面

バスがアウクスブルク市内に入り、団員達が一週間にわたってお世話になるホストファミリーと対面する会場となっているホテルが近づいて来ると団員達の不安と緊張が一気に高まってきた。バスから降りた団員達はそれぞれのホストファミリーの待つテーブルで自己紹介を始めた。団員達にはあらかじめホストファミリーの情報やメールアドレスなどが知らされており、出発の1ヶ月前からメールでの交流を始めており、不安と緊張もすぐに吹き飛び、早速、打ち解けた和やかな空気に包まれた。

受入家庭は、いずれも前年度にアウクスブルク市青年使節団の一員として尼崎市を訪問した経験を持つ団員とその家族で、尼崎市での経験や想いを胸に、心の底から歓迎をしてくださっているのがひしひしと伝わり、「真の交流とはこういったものなのだ」と安堵したり感謝したりであった。

(3) アウクスブルク市長表敬訪問

翌日は、世界最古の社会福祉住宅といわれる「フッゲライ」や両市の姉妹都市提携のきっかけとなったヤンマーディーゼル社が寄付した「日本庭園」を案内していただいた後、青年使節団としての最初の公式行事でもある「市長表敬訪問」を行った。

スーツに身を包んだ団員達の胸には、団員お揃いの日章旗と尼崎市章のバッジが光り、緊張の中にも Dr.グリーブル市長を始め、アウクスブルク市関係者の温かい歓迎

を受けて、市庁舎の中の黄金の間で行われた式典は、荘厳な雰囲気の中にも和やかに進められた。



Dr.グリーブル市長からは、アウクスブルク市と尼崎市が、1959年4月7日にドイツと日本の間での初めての姉妹都市提携を締結して以来、50年以上にわたる友好親善の歴史を積み重ねてきた意義や、両市の青年使節団の交流が40年以上にわたって続けられてきたこと、また、両市がこれまでに築き上げてきた様々な分野の交流を更に深めていく必要があり、その担い手は両市の青年達であることなどのお言葉をいただいた。

私からは、ドイツと日本は、昨年、交流150周年を迎え、アウクスブルク市と尼崎市も姉妹都市として50年以上にわたって交流してきた伝統があり、このような伝統の中で、今回、私達が尼崎市青年使節団として訪問させていただく機会を得たことへのお礼と、東日本大震災の折には、アウクスブルクの方々に大変ご心配をいただき、多くの励ましをいただいたことにお礼を申し上げます。

(4) プレラー市民祭り

アウクスブルク到着3日目は、「アウクスブルク大聖堂」、「新市立図書館」、「市立マーケット」などを視察させていただいた後、アウクスブルク市ご自慢のトラム（路面電車）に乗って、折しも開催中の「プレラー市民祭り（ビール祭り）」の会場に向

かった。

会場には、受入家庭の青年達も待っており、一緒に昼食を楽しんだ後、会場内の移動遊園地での数々のアトラクションを楽しませていただいた。

その後には大きなサプライズがあった。ちょうど会場に市長がお越しとのことでビール祭りのテントへ招待されたのである。テントの中は、アウクスブルク市民楽団の演奏の中、3,000 人近い市民がビールを片手に飲んだり歌ったりしている最中で、そこに招かれた私達は、Dr.グリーブル市長から尼崎市からの青年使節団であることの紹介やこれからの両国の交流を担う若者であることの紹介を受け、拍手喝采の歓迎を受けたのであった。



私達にとっては、この上もないサプライズであったわけであるが、市長の粋な計らいに感動すると同時に、市民からの温かい歓迎を目の当たりにして、青年使節団の意義を再認識した思い出に残る大きな出来事であった。

(5) アウクスブルク市とドイツ各地

アウクスブルク滞在中の行程は、すべてアウクスブルク市側の手配で準備されており、団員の希望も考慮され、非常に有意義なものであった。

アウクスブルクの市内視察では、「MAN・ディーゼル&ターボ社」、「市立動物園」、「市立植物園」、「市立幼稚園」、「ア

ウクスブルク大学」、「プッペンキステ人形劇博物館」、「モーツァルトハウス」など盛りだくさんの内容であった。



また、日程の間には、ロマンチック街道の終点でもあるフュッセンにある「ノイシュヴァンシュタイン城」やキリストの受難劇で有名な「オーバーアマガウ村」への小旅行が用意されていたり、帰国日の前日には、ホストファミリーとの一日という日程が組まれ、多くの団員は家族とともに、ドイツ第3の大都市でもある「ミュンヘン観光」を楽しんだようである。

(6) 会うは別れの始めなり

「出会いがあれば必ず別れる時がある。だからこそ、出会った人々とのつながりや絆を大切にしなければならない」。この言葉はまさにこの日の団員達のためにあるような言葉であった。

アウクスブルクを離れる朝、市庁舎前の広場に集まった団員達は、ホストファミリーや親しくなった人達との別れを惜しみいつまでもバスに乗ろうとはしなかった。目にいっぱい涙をため、心からの感謝を表し、本当に見えなくなるまで手を振る団員達を見て、別れがきた時、悲しみや寂しさは感じて、「後悔は無かったのだな」と安堵する気持ちで帰国の途に着くことが出来たのは言うまでもないことであった。

青年使節団事業の意義とあり方

お別れのフェアウェルパーティーの席上で、私はこんな挨拶をさせていただいた。

「今回、団員達が日本を飛び出し、直接アウクスブルクの青年達や市民の方々と接する機会を得られたことは、若い団員達にとってかけがえのない経験になったことと思います。皆様方は本当に温かく私達を迎え入れてくださり、団員達は既に新しい友人、もう一つの家族を見つけたようです。私はこのような人々との直接の出会いが末永く続くことを願っております。青年使節団の団員はまだ若く、こちらで過ごさせていただいた一週間は、今後まだまだ続く彼らの人生のほんの一部に過ぎないかもしれませんが、将来この経験を通じて何らかの形で、次の世代の姉妹都市交流、国際交流に生かしてくれると信じております」。

青年使節団事業の目的は、派遣される団員達が様々な体験を通じて、自らを高めていくことはもちろんである、それ以上にその経験を団員達の個人的経験に終わらせることなく、帰国後もその経験を他の青年達と分かち合う中で、本市の国際交流の拡大と本市の市政に生かしていくことである。幸い今回の団員達は、早くも次回アウクスブルク市から尼崎市を訪れる団員達の受入家庭になることを希望してくれており、団員達全員でこれからの国際交流に自分達に何ができるのかを考え始めてくれている。

「良かった、楽しかった」だけで終わることなく、今回の訪問を総括し、今後の国際交流の担い手として、国際交流のあり方を考え、今後の取り組みに生かしていくことを願って止まない。

結びに

今回のドイツ・アウクスブルクでの滞在を通じて、私達は、普通の観光旅行では決して味わうことの出来ない貴重な体験をす

ることが出来た。団員達はホストファミリーに家族同然の扱いをしていただき、行く先々で心温まるもてなしをしていただいた。

この報告書には団員達が経験した様々な出来事が様々な想いで綴られていることであろう。しかし、それらの貴重な体験や感動は、長年にわたって両市の中で積み重ね続けられてきた交流の上に成し得たものであり、自分達が青年使節団として姉妹都市を訪問したからではなく、アウクスブルクの人々が青年使節団として接してくれたお蔭であることに気づいてほしい。その上でこれから自分達に出来ることは何なのかを考えてほしいと願っている。

最後に、今回の青年使節団の団員達を快く受け入れていただいたアウクスブルク市のホストファミリーの皆様と様々な場面で温かいおもてなしをいただいた市民の皆様に心からお礼を申し上げる。また、今回の受入を全面的にサポートしていただいたアウクスブルク市の Dr.グリーブル市長様をはじめ、イルスペルガー氏、サボロフスキー氏、エッガー氏、ミュラー氏、原氏をはじめとするアウクスブルク市の関係者の皆様、そして、青年使節団派遣にあたってご尽力をいただいた尼崎市の関係者の皆様、事前研修においてご指導をいただいた講師の皆様方に厚く感謝を申し上げて結びとさせていただきたい。